

おおいた

AQUA NEWS

NO.45

2017.9

アクア・ニュース



表紙写真：潜水によるバカガイ資源量調査

目次

◎水産研究部長、浅海・内水面グループ長あいさつ.....	2
◎平成28年度水産研究部スタッフ及び担当業務.....	3
◎各担当、チームのトピックス	
・アオリイカの成長と産卵期(栽培資源チーム).....	4
・有害赤潮の被害軽減を目指して(養殖環境チーム).....	6
・放流ガザミを生き残らせる！放流手法の開発(浅海チーム).....	8
・ニホンウナギ <i>Anguilla japonica</i> の性と資源増殖(内水面チーム)....	10
◎浜からのたより	
・中津市のカキが注目されています！（北部振興局）.....	12
・保戸島マグロ漁船の出漁(中部振興局).....	13
◎転入者紹介.....	14
◎人権コーナー.....	16

大分県農林水産研究指導センター 水産研究部

ごあいさつ



農林水産研究指導センター
水産研究部長 末吉 隆

今年4月の定期異動で豊後高田市と宇佐市にある浅海・内水面グループから佐伯市にある水産研究部に着任しました。

組織改編前の海洋水産研究センター以来の18年ぶりの勤務となり、当時とは異なる大きな責任と期待を感じながら、引き続き「もうかる水産業」をめざしています。

さて、今年3月末に大分県は平成27年の農林水産物による創出額を発表しました。創出額のうち水産業の産出額は415億円でした。「おおいた農林水産業活力創出プラン2015」に掲げた35年目標額435億円に達するには、さらに20億円の上積みが必要です。

現在、水産研究部では産地間競争を勝ち抜く生産力強化をめざし、かぼす養殖魚や養殖ヒラマサ等の戦略品目を中心とした新たなシーズの開発や漁業被害を軽減する魚病、赤潮、貝毒対策等に取り組んでいます。

加えて今年度からはヒラメ養殖では、成長を促進するLED光の養殖現場への導入やヒラメ尾ずつにクドア検査タグの装着をめざす検査技術の有効性の検証に取り組みます。さらにトラフグやカワハギも対象にした陸上養殖での高濃度溶存酸素による赤潮被害抑制技術の開発、魚類養殖における医薬品やワクチンが未開発の疾病に対する予防や治療法の提案をめざします。

昨年3月に策定した試験研究基本指針では「ニーズ」「スピード」「普及」を行動指針としています。「おおいた農林水産業活力創出プラン2015」のゴールは平成35年ですが、気づけば既に折り返し地点も見えてきたところです。6年間で目標達成を確かなものするには「更なるスピードアップ」が重要です。水産研究部は関係者の皆様のご期待に応えるため、現場のニーズや意見を取り入れながら試験研究にスタートダッシュで取り組んでいきます。



農林水産研究指導センター
水産研究部浅海・内水面グループ長
古川 英一

4月1日付で漁業管理課から着任しました。研究職場への赴任は17年ぶりで、浅海チームは初めての職場ですが、内水面チームには6

年間勤務経験があります。微力ではありますが、県水産業の振興・発展に力を振り絞りたいと思いますので、皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

さて、平成29年度の浅海・内水面グループの主要な研究課題を紹介します。浅海チームでは、県北海域の重要魚介類であるアサリの他タイラギ、ナマコ、ヒジキなどの増養殖に関する調査研究を重点課題として取り組んでいます。

タイラギの研究としては、種苗生産技術開発及び天然稚貝を用いた養殖試験に取り組んでおり、新たな養殖業の振興と国見・姫島周辺海域を中心としたタイラギ漁場の復活を目標に日々努力しています。

ヒジキについては、健康・自然食ブーム等により国産品の需要増加に伴う価格の上昇と漁船漁業の不振が相俟って、ヒジキに対する注目度が高くなっています。このため、資源の維持・増大と安定供給を目標に、天然海域でのヒジキの生態環境調査等による増殖手法及び資源管理手法の確立と、ヒジキ養殖のための人工種苗生産技術開発に取り組んでいきます。

内水面チームでは、戦略魚種であるかぼすブリ、かぼすヒラメの内水面版として、かぼすヤマメ、かぼすドジョウ等の作出について研究しています。

重点課題以外にも、赤潮・貝毒などの漁場環境保全に関する調査や戦略魚種のタチウオ、ハモなどの資源管理強化に向けた調査研究、アユ資源調査、魚病防疫対策等についても引き続き取り組んでいきます。

漁業・養殖業者に役立ち、必要とされる研究機関を目指して、水産業の振興ともうかる漁業の実現のため、職員一同、精一杯努力して参りたいと思いますので、ぜひ、皆様方のご要望やご意見をお寄せ頂くとともに、ご支援とご協力について重ねてよろしくをお願いいたします。

平成29年度水産研究部のスタッフ及び担当業務

水産研究部長 末吉 隆		次長 佐藤 哲夫	
部 所	職 名	氏 名	主な担当業務
管理担当 豊洋	課長補佐(総括)	武石 誠一郎	管理担当の総括
	副主幹	増永 由美	管理・庶務会計
	船長	清川 弘一	調査船の運航・管理
	機関長	高木 幹也	〃
	主任船舶技師	増本 智之	〃
	主任船舶技師	合田 龍二郎	〃
	技師	藤澤 芳宏	〃
	技師	松岡 三代	〃
技師	長田 彩	〃	
企画指導担当	主幹研究員(総括)	山本 義博	企画指導担当の総括、調査研究の企画及び連絡調整、調査研究成果のとりまとめ及び広報・外部評価に関すること
	主幹研究員	堤 憲太郎	水産研究部の予算編成、漁業調査船に係わる調整、調査船代船建造、その他企画調整
栽培資源チーム	主幹研究員(TL)	徳丸 泰久	栽培資源チームの総括、藻場造成に関わる研究
	主任研究員	林 亨次	ヒラメ育種、その他の種苗生産技術開発
	研究員	山本 桂伊	ブリ種苗生産、放流技術開発
	研究員	小谷 奈央	ヒラメ種苗生産技術開発、餌料培養の技術開発
	主幹研究員	内海 訓弘	水産資源の調査研究、資源管理型漁業の調査研究、好ウオ資源回復
	研究員	中尾 拓貴	水産資源の調査研究、水産基盤整備事業調査、アジ・サハ資源調査、TAE
	研究員	竹尻 浩平	水産資源の調査研究、漁海況予報、TAC、ハマ生態調査
養殖環境チーム	主幹研究員(TL)	木藪 仁和	養殖環境チームの総括、養殖魚介類品質向上技術開発
	主任研究員	都留 久美子	魚介類養殖技術の開発、飼料の安全性評価と適正使用指導
	研究員	大竹 周作	赤潮・貝毒の監視と対策指導、予知技術開発
	研究員	井口 大輝	養殖漁場環境調査と適正管理推進指導、環境保全指導
	主任研究員	木本 圭輔	養殖魚類病害防除技術・健康診断技術開発
	主任研究員	福田 穰	養殖魚介類の疾病診断、衛生管理・ワクチン使用指導
	研究員	甲斐 桑梓	養殖魚介類の防疫対策、生産物の安全性確保指導
浅海・内水面グループ 管理担当	グループ長	古川 英一	浅海・内水面グループの総括
	主幹	利光 秀紀	庶務・会計
浅海チーム	主幹研究員(TL)	木村 聡一郎	浅海チームの研究総括、資源評価調査(資源関連)
	主幹研究員	岩野 英樹	ヒジキ等藻類の増殖技術開発、赤潮・貝毒の被害防止対策、アサリ等の漁場環境調査
	主幹研究員	金澤 健	タイラキの種苗生産・増養殖技術開発及び資源量調査、豊前海アサリの資源量調査
	主任研究員	白樫 真	ハマ、ハカガイ等の資源生態研究、ナルビエイ対策技術開発、海況調査、資源評価調査(卵稚仔関連)
	主任研究員	山田 英俊	アサリの増養殖技術開発、養殖用アサリ種苗生産、種苗生産用生物餌料の培養技術研究
	研究員	菅沼 倫美	ヒジキ等藻類の種苗生産・養殖技術開発、川養殖の病害対策及び指導
	研究員	山本 宗一郎	キジハタ、ガザミ等の放流効果研究、マコレイ等の資源回復対策、魚礁効果調査
	研究員	宇都宮のぞみ	ナマコの種苗量産及び増殖技術開発、カキ類の養殖指導
内水面チーム	主幹研究員(TL)	畔地 和久	内水面チームの総括、カワウ・外来魚対策、魚類防疫対策
	主任研究員	徳光 俊二	ドジョウ・スッポン飼料開発、スッポン・アマゴ・ヤマメの増養殖技術開発の普及、内水面漁業・養殖技術の普及、ウナギ資源、希少魚水生生物保存対策
	研究員	吉井 啓亮	アユ資源、アユ養殖技術開発、陸封アユの有効利用に関する調査研究、漁場環境保全

職員数40名(内訳 研究職27名 海事職7名 行政職員等6名)

アオリイカの成長と産卵期

栽培資源チーム 主幹研究員 内海 訓弘

日本にはシロイカ型、アカイカ型、クアイカ型の遺伝的・生態的に異なる3種類のアオリイカが分布していますが、大分に分布しているのは、シロイカ型でクアイカ型はおらず、アカイカ型もほとんどいないと思われます。3種は漏斗の色素で判別することが可能です。また、アオリイカの雌雄は背側の斑紋で判別することができ、線状の斑紋の個体が雄(写真1)、楕円状の斑紋の個体が雌(写真2)で、雄のほうが雌よりも大型になります。



写真1 雄



写真2 雌

アオリイカは標準和名ですが、大分では断然モイカと言ったほうがとおりがよく、モイカはスルメイカ(大分県南ではマツイカと呼ばれる)やケンサキイカ(大分県南ではスルメと呼ばれる)よりも身近で親しまれているイカです。大分型といわれる餌木(モイカを釣る和製ルアー)の形状があるくらいで、秋から冬にかけて岸からでもよく釣れ、最近では釣り人にも人気です。

大分県中部の津久見湾ではバッテリーという船びき網で主に漁獲され、10月～翌年1月にかけてモイカフェスタと銘打って津久見市内の飲食店でモイカ料理を提供するイベントが開催され、漁港でモイカを一夜干しにしている様子は冬の風物詩的な風景になっています。

このモイカ(アオリイカ)について、近年漁獲量が減ったのではないかという話があること、大分ではあまり調査の対象にされてこなかったことから、津久見湾を中心に2016年から調査を行っています。

今回は市場に水揚げされたアオリイカと定置網で漁獲されたアオリイカの性別、外套背長、体重、生殖腺重量等の測定結果からみえてきた成長と産卵期について紹介させていただきます。

まず市場での調査ですが、臼杵、津久見、佐伯、鶴見に水揚げされたアオリイカの外套背長を月に3回測定した外套背長組成を示したものが図1になります。2016年4月に調査を始め7月までは2015年級アオリイカしか確認されませんでした。8月に初めて100mm以下のアオリイカが市場に水揚げされ、2016年級が確認されました。8月に60～80mmにモードがみられた2016年級アオリイカは、9月に120～140mm、10月に140～160mm、11月に180～200mm、12月に180～200mm、2017年1月に200～220mm、2月に220～240mm、3月に240～260mmとモードが推移し、成長の様子がわかります。

また、津久見湾内の定置網で漁獲されたアオリイカの生殖腺重量指数(GSI: $100 \times \text{生殖腺重量} / \text{体重}$)の推移を示したものが図2になります。雄ではGSIが1を越える個体が2016年4月の調査開始時点から確認できます。雌では4月にはGSIが1を越える個体は確認できず、5月になってGSIが5を越える個体を確認できました。9月には雌のアオリイカが入手できませんでしたが、津久見湾でのアオリイカの産卵期は5～8月と考えられます。ただし、昨年は9月に雌が入手できなかったため産卵の終期についてはもう少し検討が必要かと思っています。

今後は市場や定置網漁獲物のデータをさらに蓄積していくとともに、津久見湾内でどのような場所(岩礁域、転石帯、砂地等)のどのような基質(アマモ、ホンダワラ類、クロメ等)に産卵が行われているかについても調査を行っていく予定です。

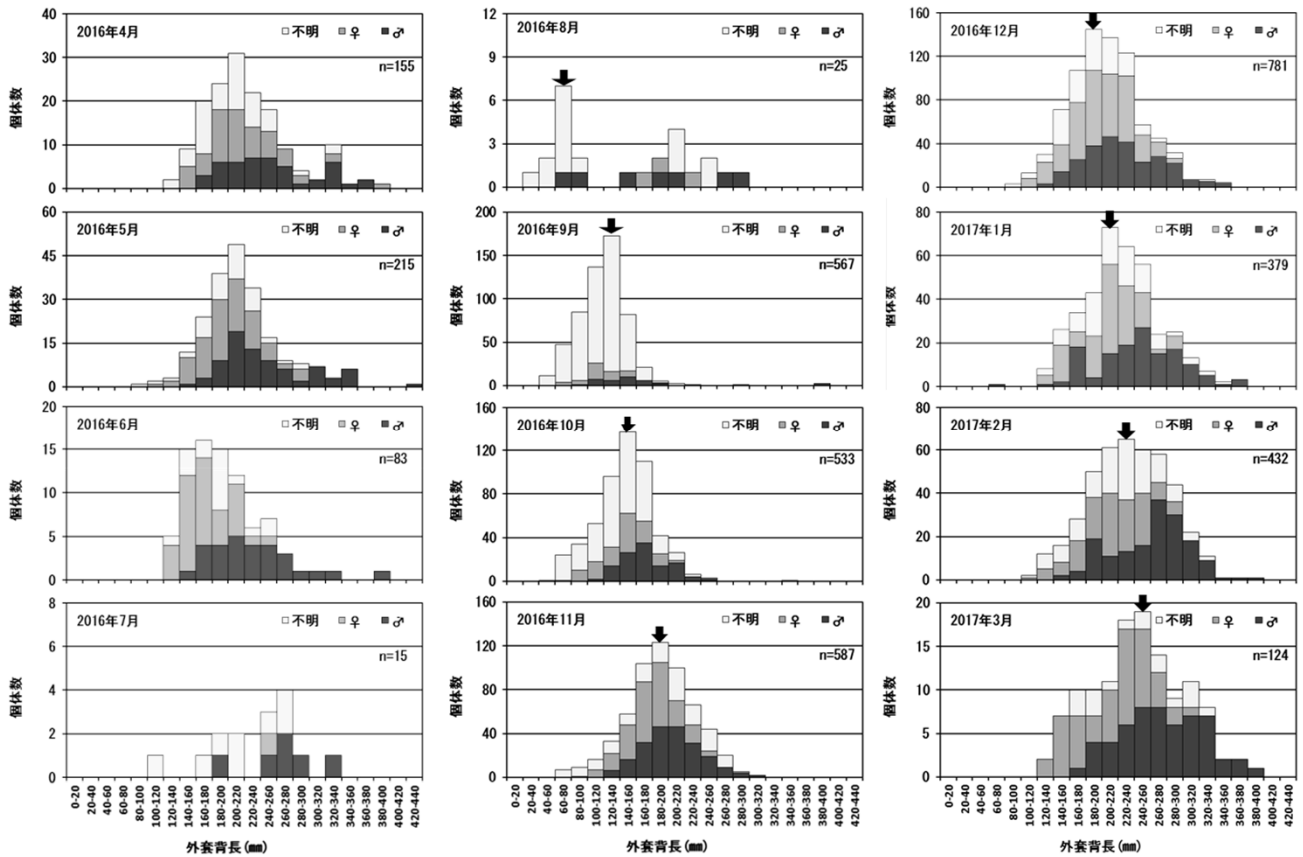


図1. 臼杵・津久見・佐伯・鶴見市場調査におけるアオリイカ外套背長組成（2016年4月～2017年3月）

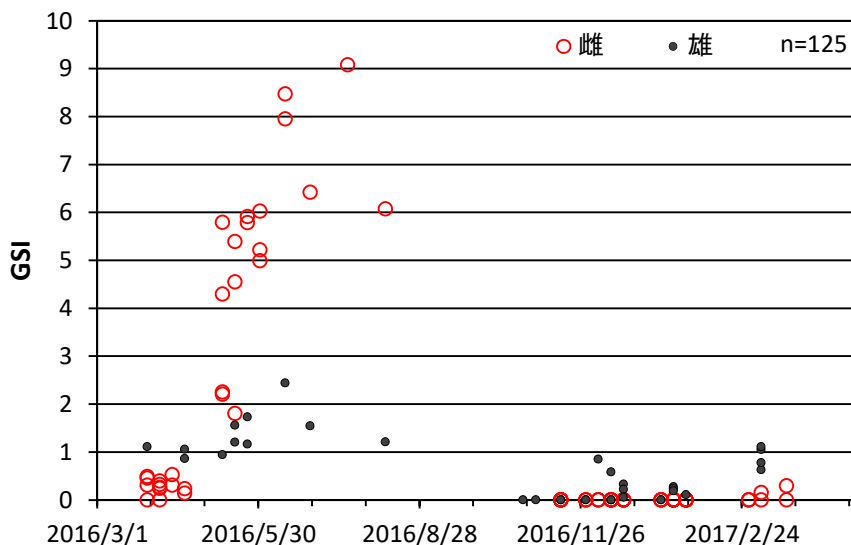


図2. 津久見湾内の小型定置網で採捕されたアオリイカの生殖腺重量指数(GSI)の推移表層

有害赤潮の被害軽減を目指して ～新規赤潮防除技術の開発～

養殖環境チーム 研究員 井口 大輝

有害な渦鞭毛藻の一種であるカレニア・ミキモトイ (*Karenia mikimotoi*) (写真1)は、大分県沿岸でたびたび赤潮を形成し、天然及び養殖魚介類をへい死させて大きな被害をもたらしています。特に昨年度は入津湾において、本種による大規模な赤潮が発生し、天然のアワビやサザエ、養殖のトラフグやヒラメ等で大きな被害が発生しました。そこで今回は、赤潮被害の軽減を目指して、現在水産研究部で試験している赤潮防除技術開発の概要について紹介します。

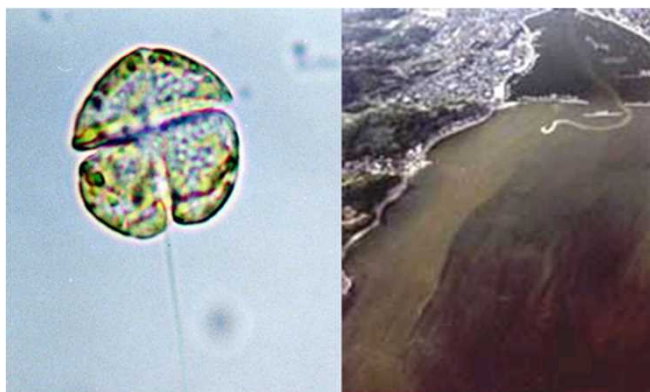


写真1 カレニア・ミキモトイ

植物プランクトンであるカレニア・ミキモトイ(以下、「カレニア」)は、日光を利用した光合成により増殖していきます。しかし、強すぎる光では増殖できず弱ってしまうため、晴れた日は、光がある程度弱まる中層で増殖していきます。このような特性に着目し、中層にいるカレニアを強制的に光の強い表層に浮上させることで、カレニアを弱らせ、死滅させられるのではないかと考えました。そこで開発されたのが赤潮浮上装置です(写真2)。



写真2 赤潮浮上装置

この赤潮浮上装置を用いると、水中ポンプで中層のカレニアを海水ごと表層に浮上させることができます(図1)。

赤潮浮上装置を、平成28年6月3日～8月4日の間、実際にカレニア赤潮が発生する佐伯湾松浦漁港奥(図2)に設置し、カレニアの増殖に対する抑制効果を試してみました。その結果、装置の影響の少ない周辺の調査点1～3では、装置稼働後の細胞密度が増加または停滞傾向であったのに対し、装置設置箇所では、稼働前に570細胞/mlいたカレニアが、稼働開始5日後には、細胞密度が約半分の300細胞/mlに急激に減少しました(図3)。

以上の結果から、この赤潮浮上装置は、中層のカレニアを表層付近に浮上させることにより、カレニア赤潮の発達を抑止できたと考えられます。将来、この装置によってカレニア赤潮被害が少しでも防げることを願いながら、今年度も引き続き同様の試験を行っております。

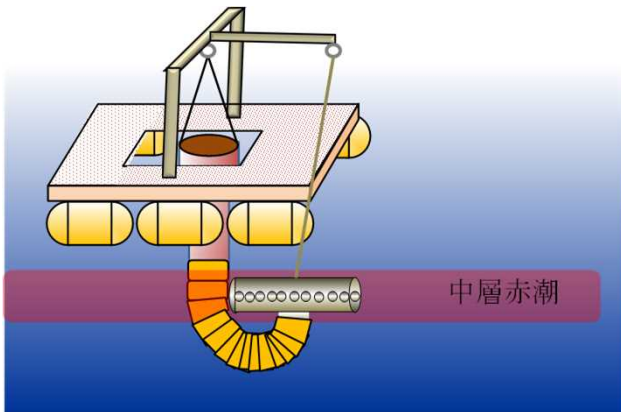


図1 赤潮浮上装置の水中イメージ図
及び出水口の写真

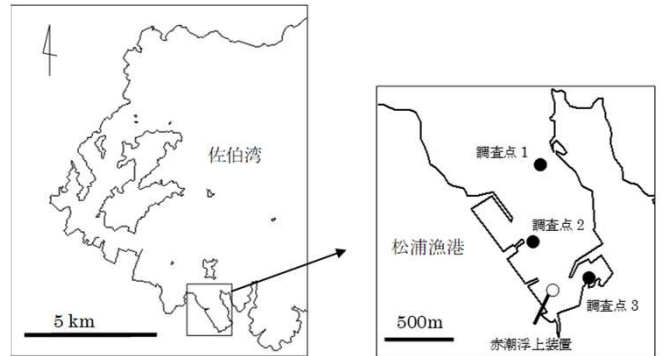


図2 赤潮浮上装置の設置位置と調査点

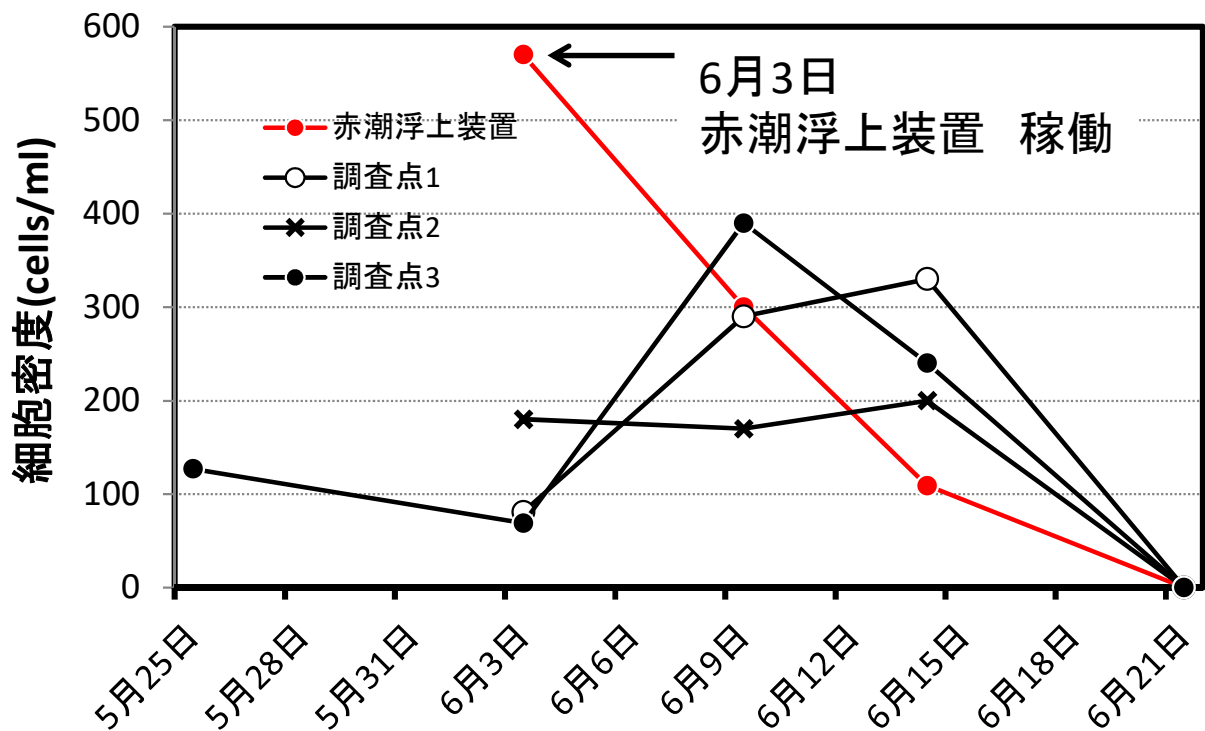


図3 カレニア・ミキモトイ細胞密度の推移
(赤潮浮上装置付近とその周辺調査地点)

放流ガザミを生き残らせる！放流手法の開発

浅海チーム 研究員 山本 宗一郎

ガザミ(ワタリガニ)は豊前海において重要な魚種であり、甘みのあるぎっしりと詰まった身はとても美味で、「岬ガザミ」や「豊幸ガニ」といったブランド化も進められています。しかし、近年のガザミ漁獲量は不安定であるため、資源を維持しようと各地先で種苗放流が行われています。

浅海チームでは、より効果的な種苗放流手法の開発に向けた研究に取り組んでおり、今回、これまでに得られた稚ガザミの放流に関する知見等ついでご紹介いたします。

1 放流ガザミの生息状況

放流ガザミを追跡するため、2016年8月8日に豊後高田市見目の干潟で種苗放流(12万尾)を行いました(写真1)。放流後、放流付近の干潟に生息するガザミを定期的にサンプリングし、採捕した94尾についてDNA標識による解析をした結果、15尾が放流個体であることが分かりました。また、全甲幅約1cmで放流したガザミが、98日経過後の10月25日には全甲幅7.5cmまで成長していました(図1)。

ガザミは放流場所にもしばらく留まって成長することが明らかになりました。



写真1 放流ガザミ

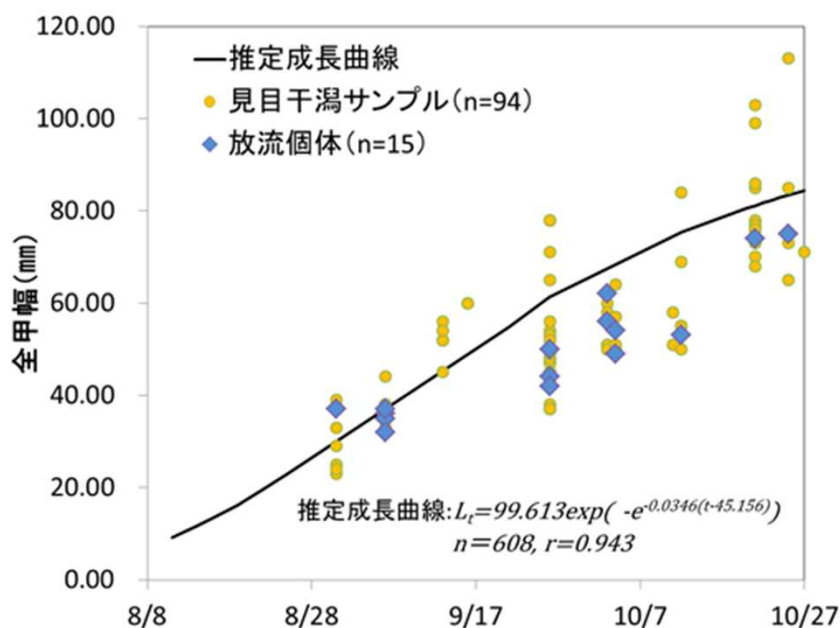


図1 放流ガザミの推定成長曲線とDNA分析結果

2 ガザミ放流の新手法の開発

ガザミは流れ藻や海苔網等に蛸集することはよく知られており、この習性を利用してガザミ種苗を中間育成する時には、海苔網等を隠れ家として用いることで共食いを軽減させ生存率を高める方法がとられています。種苗放流時においても、使わなくなった海苔網等をシェルターとして干潟に設置することで、放流直後の稚ガザミを害敵から守り、生残率を高めることができると考えられます。

そこで、浅海チーム内の水槽を用いて放流シミュレーション実験を行いました。2016年8月10日に屋外水槽(6m×8m)に3色(白、紫、青)の海苔網を設置して、10万尾の稚ガザミ(全甲幅1cm)を收容し、定期的に海苔網に滞留している個体と網の無い場所に滞留している個体の密度を比較しました。その結果、10日間の飼育期間を通して、ガザミは網の色に関係なく、海苔網に滞留しやすいことが明らかになりました(写真2、図2)。

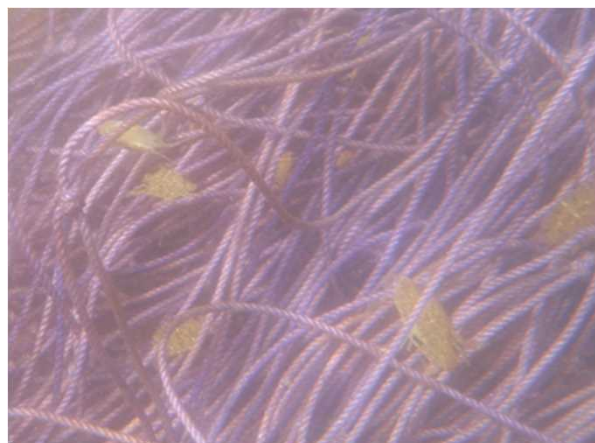


写真2 海苔網に滞留しているガザミ

今後は放流現場で海苔網を利用した放流試験を行い、この新しい手法の有効性を検証し、現場へ普及していきたいと思えます。

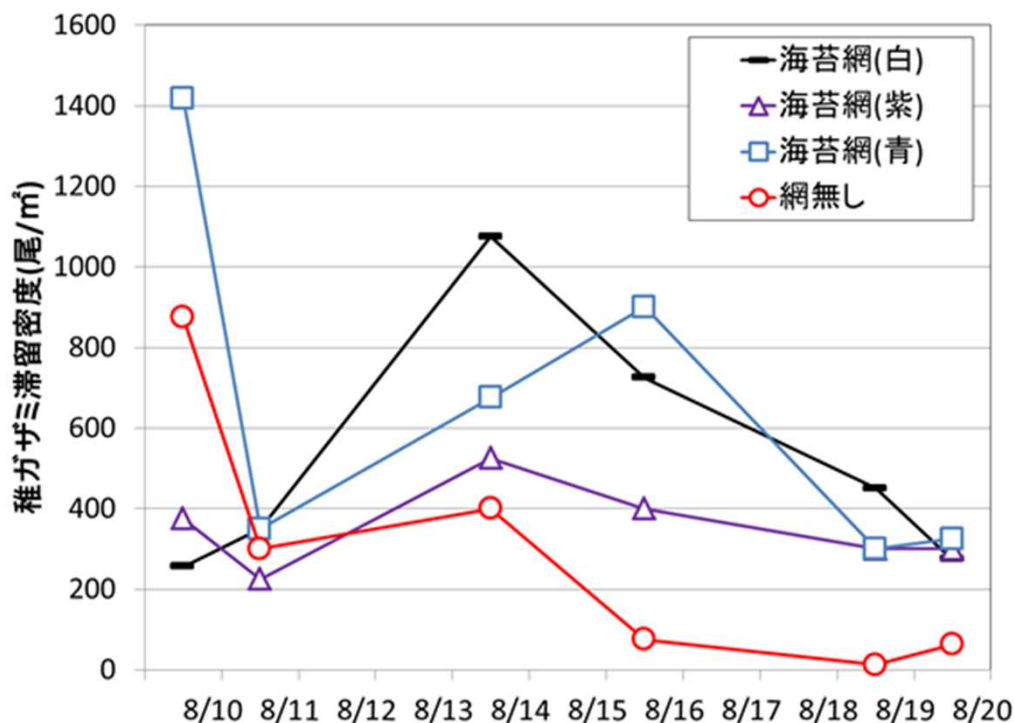


図2 放流シミュレーション実験の結果

ニホンウナギ *Anguilla japonica* の性と資源増殖

内水面チーム 主任研究員 徳光 俊二

ウナギといえば蒲焼きといえるほどお互いに真価を發揮させる調理方である。蒲焼きという呼び名や土用丑の日に食べる習慣などの由来についてそれぞれ諸説あるが、うまく宣伝に用い商売と結びつけ、一般に習慣化させたところが面白く、ウナギは日本人になじみの深い魚となった。また、子供時分に田んぼの水路などでもウナギを獲った記憶がある方も多いただろう。どこにでも生息するとても身近な魚でもあった。

そのウナギの漁獲量は昭和52年に全国で2,102tであったが、その40年後の平成28年にはわずか68tであり、3.2%にまで急激に減少している。国際資源保護連合(IUCN,2014)は漁獲量の減少が著しいことから、ウナギを絶滅する危険性が高い絶滅危惧種に指定した。この減少要因としては温暖化などの気候の長期変動や河川や水路の分断やコンクリート護岸や暗渠による生息域の減少などが挙げられるが、現場からしてみれば雲を掴むような話で、具体的に組みめる資源回復策の提示が望まれる。

ウナギの生態については産卵場がマリアナ諸島西方など熱帯の外洋域と判明し、人工種苗も僅かながら生産されるに至り、その謎めいた生態も随分解明されてきたが、未だ残された謎がある。そのひとつがウナギの性がどのようにして分化、決定しているかが未解明とされていることである。ウナギの性は体長110-200mmで決定するとされる。それはシラスウナギが沿岸に来遊し、クロコといわれるサイズで河川生活を始めた後のことである。

養殖ウナギはシラスウナギを採捕し養成するため、養殖環境下で性が決定される。この飼育環境ではほとんどが雄になり、雌に分化する個体は5%以下とされる。また、一見すると雄に見えるが、組織観察すると精巣の中に少数の卵母細胞が存在する雄間性個体が20%程度出現する。

また、天然ウナギでは河川上中流域に遡上したものはほぼ雌であり、雄はほとんど遡上せずに感潮域に多く生息するなど漁獲された水域によって性比が異なる。2016年の守江湾で漁獲したウナギの測定結果では、雄は平均全長470mm 体重150gと小型で成熟し銀ウナギとなって海に降るが、雌の銀ウナギは最小でも全長約560mm、体重250g、大きいものでは全長1mを超え体重は数kgになることから高齢のものも多く、一見すると漁獲されるウナギは雌が多いと思える。しかし、雄の成熟サイズより小型の400mm以下のウナギは雌90尾:雄77尾:未成熟または不明27尾となり性比は概ね1:1となることから、天然では環境要因ではなく、遺伝子によって性決定されている可能性も残される。

ウナギの資源量の底上げを行うために、河川漁協では毎年種苗放流を行ってきた。一般的に養殖ウナギの低成長群が種苗放流に用いられ、これは養殖環境下で雌の成長が雄より遅く、低成長群の中に雌が含まれる割合が多少高いことが分かっており、性決定が解明されていない現状では雌を少しでも増やすためにこのような低成長群を放流することを是としておきたい。しかし、雄間性個体もこの低成長群には多く含まれることが分かっており、これらが資源に及ぼす影響は分かっていない。

もうひとつの方法として性決定前のものが含まれる200mm未満のクロコを種苗放流する方法も現時点では是としておきたい。しかしながら、この放流したクロコがどのように性分化するのかといった知見は得られていない。

また、資源量推定を行う上で性比が重要な要素となることや、ウナギの様に雌雄で生態の大きく異なる魚は雌雄別に資源量推定を行う方法もあり、この性決定という要素の解明が急がれている。

※ 2011年に外国産ウナギとの混同を避けるために標準和名が「ウナギ」から「ニホンウナギ」に変更されたが、ここではタイトル以外はウナギに統一した。

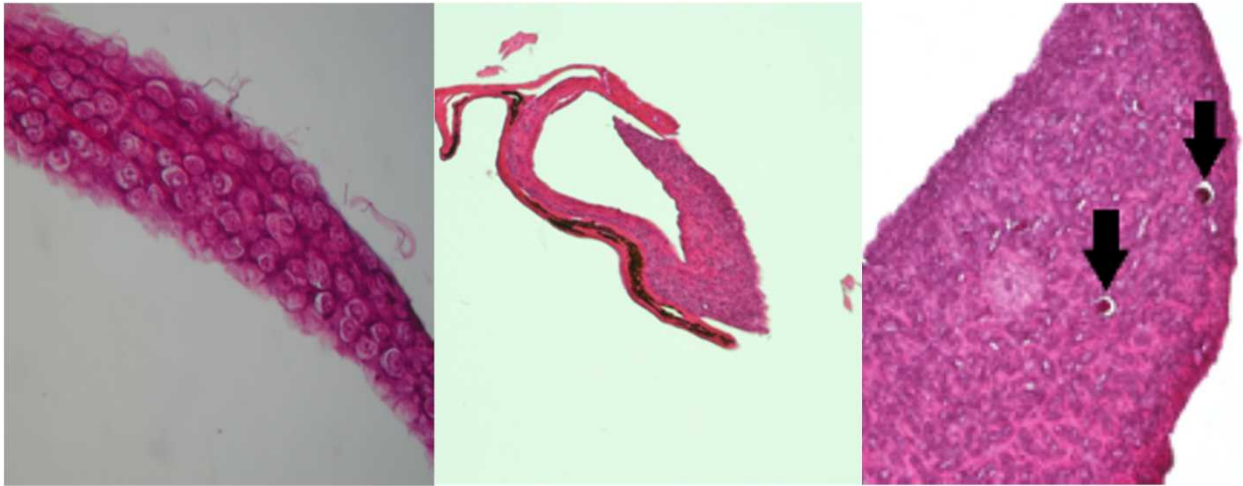


図1 左:雌(TL256mm BW10.13g)の生殖腺、卵母細胞が観察される。中:雄(TL292mm BW24.80g)の生殖腺、筋繊維により小部屋を形成している。右:雄間性個体(TL388mm BW74.42g)の生殖腺、筋繊維で小部屋を形成している中に卵母細胞(矢印)が認められる。



図2 左:黄ウナギ (Yellow eel) といわれる河川や感潮域に生息する未成熟なウナギ、右:銀ウナギ (Silver eel) といわれるいわゆる降りウナギ、全体的に黒く、光沢を帯びるが、特に胸びれの黒化が特徴的である。

中津市のカキが注目されています！ ～その名もひがた美人～

北部振興局 農山漁村振興部 堀切 保志

ひがた美人と聞いて何を思い浮かべますか？今では多くのメディアに取り上げられており、耳にしたことのある方も多いかもしれません。実は、中津市の干潟で養殖されるカキのことです(写真1)。ひがた美人は主に生食用として首都圏のオイスターバー、市内飲食店、漁協直営カキ小屋、郵パックなどで販売されています。



写真1 ひがた美人

ひがた美人は一般的なカキと比べて異なる特徴があります。一般的なカキの種苗は、ホタテ貝などに付着した状態で筏の上から垂下して養殖されますが、ひがた美人は支柱式養殖により、シングルシードとよばれる状態で1粒1粒ばらばらにバックの中で養殖されるので綺麗な形に育ちます(写真2)。また、干潟で養殖することで、潮の干満によりカキが空気中にさらされるため、貝柱がしまり、濃厚でしっかりとした身に育ちます。



写真2 支柱式養殖

試行錯誤の中始まった中津でのカキ養殖は今年で4年目を迎えました。漁協、市、県が一丸となって日々養殖技術の向上、販路拡大に取り組んでおり、他県への視察、首都圏での販促活動に参加しています(写真3)。多くの競合する他産地のカキに打ち勝つためには、多くの課題解決が必要です。中津市といえば、「からあげ」「ハモ料理」そして「ひがた美人」と言ってもらえるように、関係者一丸となって頑張っていきます。



写真3 都内イベントでの販促活動

保戸島マグロ漁船の出漁

中部振興局 農山漁村振興部 吉岡 宗佑

【新たな担い手の船出】

2017年6月8日、マグロ漁船の基地として有名な保戸島から島出身の藤田康史郎さん(20)が初めてのマグロ漁に出ました。子どもの頃からマグロ漁師に憧れ、県立津久見高校海洋科学学校(現・海洋科学高校)で航海技術を学びました。島出身の後継者の誕生は12年ぶりとなり、島では将来の船長として大いに期待されています。この日は、航海の安全と豊漁を祈り、島を挙げて初出漁を見送りました(写真1)。



写真1 島を挙げて初出漁の見送り

【保戸島マグロ漁の昔と今】

保戸島のマグロ漁は明治時代中ごろから始まったとされています。ピークの1980年には、はえ縄漁船が167隻ありましたが、現在では14隻、マグロ漁従事者もかつては1000人ほどいましたが、今では30人ほどに減少しました。

【保戸島マグロ漁の航海】

保戸島がマグロ漁船の基地ということを知っている方は多いと思いますが、どんな場所で操業し、どんな場所で水揚げされているか知っていますか？

近年の主な漁場は北西太平洋と南太平洋のミクロネシア近辺で、漁獲されたマグロは冷凍されることなく生のまま和歌山県勝浦港、宮城県塩釜港、鹿児島県鹿児島港などに水揚げされます。

今回出漁した船はマリアナ諸島東側海域を操業、ビンナガマグロ、メバチマグロ、キハダマグロを漁獲する予定で、航海日数は約40日です。

日本から遠く離れた海で操業する漁船ですが、県漁協保戸島支店にある案内板で操業の様子を知ることができます。島民の方々は、毎日更新されるこの案内板で家族や友人の乗る漁船の状況を確認しています(写真2)。

10月3日 漁業通信速報			
78 新丸丸 操業中 N ₂₃ E ₁₂ 146/62/55/47	8 庄福丸 沖出中 N ₁₁ E ₃₂	8 幸伸丸 沖出中 N ₄₀ E ₄₈	1 雄星丸 操業中 N ₃₇ E ₃₇ 155/57/67
78 海王丸 沖出中 N ₃₅ E ₃₅	1 豊栄丸 操業中 N ₃₇ E ₅₀	1 豊栄丸 操業中 N ₄₀ E ₅₁	8 俊栄丸 一回目操業中 N ₁₇ E ₁₇ 154
8 庄福丸 沖出中 N ₁₁ E ₃₂	1 芳丸丸 操業中 N ₃₇ E ₅₃	8 幸伸丸 沖出中 N ₄₀ E ₄₈	1 雄星丸 操業中 N ₃₇ E ₃₇ 155/57/67

写真2 漁船の状況を知らせる案内板

【保戸島マグロ漁の今後】

全国的に水産業の担い手不足が続く昨今、保戸島のマグロ漁業も例外ではなく、漁業新規就業者フェアへの参加など新たな担い手の確保に向けた取組に力を入れようとしています。

今回、初出漁を迎えた藤田さんは、島の子どもたちにとってヒーローのような存在だったそうです。ヒーローの背中を追って、また新たなマグロ漁の後継者が誕生してくれることを期待しつつ、私たちも新たな担い手の確保に向けた取組を支援していきます。

転入者紹介 ～よろしくお願ひします！～

《水産研究部》

【次長 佐藤哲夫】（大分県税事務所から転入）

このたびの異動で大分県税事務所から参りました佐藤です。これまでの県庁生活では、ほとんど福祉や税務畑で、水産や研究機関というのは、初めての勤務です。加えて、職場から歩いて10分程でビーチ（瀬会海水浴場）という抜群の環境に毎日新鮮さを感じています。

当研究部も施設の老朽化、調査船の更新、ワークライフバランスのさらなる推進など課題はたくさんありますが、おいしく、安全な魚の提供のため水産関係者、消費者にとって頼れる研究機関となれるよう、縁の下から支えていこうと思います。よろしくお願ひします。

【課長補佐 武石誠一郎】（社会教育総合センターから転入）

このたびの異動で社会教育総合センターから参りました武石です。農林水産部は3回目です。通算6年目になりますが、水産及び研究機関は初めてです。

佐伯市出身ですが、出身地での勤務は30年以上前であり、感慨深いものがあります。

やはり出身地は、県内では気候が他の地域に比べて穏やかです。過ごしやすい土地だと改めて感じております。また、魚がおいしいことはいうまでもありません。

その魚に関する仕事を行う当研究部で研究員の皆様のフォローができるように頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。

【主幹研究員 山本義博】（北部振興局から転入）

この度の異動で、北部振興局から企画指導担当に配属になりました山本です。水産研究部は平成20年度以来8年ぶりの勤務となります。業務は研究の企画や連絡調整、広報・広聴、研修などを担当します。現場のニーズを迅速につかみ、大分県水産業の発展に努めて参りますので、よろしくお願ひします。

【研究員 竹尻浩平】（新規採用）

本年度より新規採用で栽培資源チームに配属になりました。竹尻浩平と申します。

出身は神奈川県座間市で、大学時代にはキジハタ稚魚保護礁から出現する餌生物についての研究を行っておりました。

私は担当として、海況・魚群速報、漁海況速報、モジャコ速報の発行、ハモの生態調査にとりくみ、大分県の水産を盛り上げるべく尽力する所存であります。

わからないことばかりでご迷惑をお掛けすることが多々あるかと思いますが、なにとぞよろしくお願ひいたします。

【研究員 小谷奈央】（新規採用）

この度、新規採用で栽培資源チームに配属になりました小谷奈央と申します。出身は津久見市四浦です。ヒラマサ複合養殖推進事業の担当をしております。早く頼りになる研究員になれるよう、学ぶ姿勢を大切に明るく元気にがんばります。ご迷惑をおかけする点多いかと思いますが、末永いご指導のほどお願ひ申し上げます。

【主任船舶技師 増本智之】（漁業取締船はつかぜから転入）

このたびの移動で、漁業取締船「はつかぜ」から漁業調査船「豊洋」に配属になりました増本です。

水産研究部は18年振り、新採の1年間だけお世話になりました。

当時はソフトボール大会、駅伝大会、サッカー大会等、主に仕事外の行事で活躍した記憶がありますが、今回は仕事でも役に立てるように一生懸命頑張りたいと思っております。

どうぞよろしくお願ひします。

【主任船舶技師 合田龍二郎】（漁業取締船はつかぜから転入）

この度の異動で漁業管理課漁業取締船から水産研究部漁業調査船豊洋に配属されました合田と申します。

今まで漁業取締船での業務経験が少なく、調査船での業務はとりまく環境が大きく違うので、戸惑うことも多くありますが、調査船での調査は今まで経験したことがないことが多いのでとても勉強になります。少しでも調査の力になれるようがんばっていきますので、どうぞよろしくお願ひします。

《浅海・内水面グループ》

【主幹研究員 木村聡一郎】（水産振興課から転入）

この度の異動により水産振興課から参りました浅海チームの木村です。浅海チームへは2年ぶりの配属となり、試験研究の進行管理や外部との連絡調整などを担当することになりました。成果と普及を常に意識し、スピード感を持って、少しでも漁業現場のお役に立ちたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

【研究員 白樫 真】（漁業管理課から転入）

今年度より、浅海チームに配属となりました白樫真です。昨年1年間宮城県に復興支援で赴任し、貴重な経験や多くの人との出会いがありました。人とつながり、現場の声に応える試験研究を目指して、取り組んで参ります。担当はハモや定線調査などになります。皆様に役立つ情報を発信できるよう、邁進しますのでよろしくお願いいたします。

【研究員 吉井啓亮】（新規採用）

今年度より、新規採用で内水面チームに配属されました吉井啓亮(けいすけ)と申します。アユの資源調査や疾病対策を担当しています。新規採用で内水面チームに配属されるのは久方ぶりとのことですが、日々魚やスッポンたちと戯れながら元気に過ごしています。大学では魚類病理学を研究していましたが、現場に出るのは初めてなので、まだまだ学ぶことばかりです。知識と経験を積んで、大分県の内水面水産振興に一日でも早く役立てるよう、尽力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

人権コーナー

まずは自分から

あなたは、人の言動に傷ついたことはないですか？

あなたは、誰かをいじめたこと、誰かを傷つけたことを後悔していませんか？

人権が守られる社会、誰もが自分らしく生きていける社会、差別やいじめのない社会……。人権の大切さが言われ始めてから、長い年月が過ぎました。いったい、いつになれば、みんなが幸せに生きていけるのでしょうか？いったいどうすれば、そういう社会になるのでしょうか？

私たち一人ひとりが集まって社会ができていけるのなら、その社会を変えるためには、私たち一人ひとりが変わらないといけないのではないのでしょうか？

自分の言葉や行動で傷ついている人がいないか、嫌な思いをしている人はいないか、ときどき振り返ってみませんか？そして、そういう自分に気づいたら、少しずつでも変わっていきませんか？

* 詳しくは大分県ホームページ こころちゃんのへや (<http://www.pref.oita.jp/site/kokoro/>) からごらんください

○問い合わせ先 大分県生活環境部 人権・同和对策課 啓発班

〒870-8501 大分市大手町3丁目1-1 TEL 097-506-3177 FAX 097-506-1751



編 集

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

発行者・連絡先

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

ホームページアドレス <http://www.pref.oita.jp/soshiki/15090/>

水産研究部

管理担当、企画指導担当

栽培資源チーム、養殖環境チーム

佐伯市上浦大字津井浦194-6 (〒879-2602)

Tel 0972-32-2155 Fax 0972-32-2156

E-mail a15090@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ

管理担当、浅海チーム

豊後高田市呉崎3386 (〒879-0608)

Tel 0978-22-2405 Fax 0978-24-3061

E-mail a15091@pref.oita.lg.jp

水産研究部 浅海・内水面グループ

内水面チーム

宇佐市安心院町荘42 (〒872-0504)

Tel 0978-44-0329 Fax 0978-34-4050

E-mail a15091@pref.oita.lg.jp